【原　　著】

保育士と親の二重役割から見た保護者支援に対する意識

片山　美香

Awareness of Parental Support in Light of the Dual Roles of a Nursery Teacher and a Parent

KATAYAMA Mika

2023
岡山大学教師教育開発センター紀要　第13号　別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.13, March 2023

岡山大学教師教育開発センター紀要，第 13 号（2023），pp.83 － 97

【研究論文】

原　著

保育士と親の二重役割から見た保護者支援に対する意識

片山　美香※1

本研究では，従来あまり検討課題として取り上げられることのなかった子育てを経験している保育士の親としての役割と保育士としての二重役割が，子育て及び保育全体を含めた保護者支援の専門的力量にもたらす相互の関連について検討した。

その結果，保育士の子育て経験は子どもに対する多面的な理解の拡充に加え，園でしか見ることのなかった子どもの姿を家庭での姿も含めて捉えることによって，子どもの日常の連続的な把握を可能にし，子ども理解が深化することが分かった。また，保護者（親）としての当事者性をもった保育士ならではの保護者理解により，保護者の心情や日常への想像力が高まることによって，共感的な理解が深まると共に，保護者に受け入れられる支援を見出す可能性が示された。他方，両立の困難さに葛藤を抱えながら職務を継続している保育士の厳しい現況が改めて確認された。

キーワード：保育士，子育て経験，二重役割，子ども理解，保護者支援

※1　岡山大学学術研究院教育学域

Ⅰ　問題と目的

2015 年４月から施行されている「子ども・子育て支援新制度」では，子育てが社会保障の一部に位置付けられ，保護者が子育ての第一義的責任を有するという基本的理念の下，単なる仕事と家庭の両立支援にとどまらず，すべての子ども・子育て家庭を社会全体で支える巨視的な支援へと発展した。2017 年３月に告示された『保育所保育指針』では，従前の「保護者に対する支援」の章が「子育て支援」に改められ，保育士には子どもの最善の利益を考慮し，全ての子どもの健やかな育ちを実現できるよう，在園児の保護者の子育て支援はもちろん，地域の子育て家庭の子育てを自ら実践する力の向上に資する役割（厚生労働省，2017）がより一層求められるようになった。保育士に求められる子育て支援の力量は，子どもの発達理解を促すための助言，排泄や食育といった具体的な生活援助を行う方法を助言する等の「保護者の養育力の向上に資する直接的支援」，保護者の心情や態度を理解し，共有しようとする等の「保護者の心情を汲み取る支援」，保護者が子どもの様子等を観察する機会を提供する等の「保護者の養育力の向上に資する間接的支援」，保護者や子どもの状態を把握するための情報収集等の「保護者の支援に必要な情報収集」と多岐に亘る（片山・髙橋，2021）。

保育者独自の保護者支援とは，子どもの権利や発達を保障する保育技術を根

底に備え（柏女（2010），子ども理解を要として（岸本・武藤，2017），子どもの健やかな成長を目指して保護者を支援することである。しかしながら，その実践は容易ではない。「保護者対応等の大変さ」が保育士の退職理由の一つとして挙がることもある（東京都保育士実施調査，2019）。金城・安見・中田（2011）は，保育経験年数が２年から 27 年の保育者がいずれも経験年数に因らず，保護者とのコミュニケーションに困難を感じていることを指摘している。成田(2012)は保育経験年数が 40 年目までの幅広い経験年数を持つ保育者を対象とした調査から，経験年数５年目くらいまでは自身のコミュニケーション力の乏しさに起因する保護者対応の難しさを抱いているが，経験を積んでくると保護者に起因する課題に困難を抱く実態を明らかにしている。困難感の質に違いはあるものの，保育経験年数を問わず，保育者が何らかの保護者支援上の困難感を抱いていることを示している。一方，若くて保育経験が少なく，子育て経験のない保育者は，自分よりも年齢が高く，子育て経験のある保護者への対応に困難を感じ，とりわけ子育て経験のなさに引け目を感じる傾向にある（片山，2016）。これは逆に，保育士が自らの子育てを経験することにより，保護者支援に質的な変化が生じる可能性を示唆する見解であると言えよう。もちろん，保護者支援力の形成に子育て経験は必要条件ではない。しかしながら，保育士の生涯発達におけるキャリア発達という観点からすると，保育士自身の子育ての経験と専門性との関連を見出すことは有用であると考える。こういった保育士の私的な子育て経験と保護者支援を含む保育への影響を指摘する研究も散見される（上田・澤田・赤澤，2007；衛藤，2015）。また，保育の専門性としての子育てを保護者支援に生かすにあたって，個人内の保育士としての子育て観と親としての子育て観を擦り合わせる試みは，支援する側とされる側の両者の立場に立ったより良い支援の在り方を見出す可能性を持つものと捉えられる。経験年数に因らず保護者支援には困難感が伴うとの指摘に対して，多様な保育士が協働する職員集団が保持する有用な支援リソースの発見に寄与する可能性も期待できるのではないかと考える。さらに，保育士不足が社会問題化している現在，保護者の子育てと仕事の両立支援を担う保育士自身が自らの出産を機に離職する者が一定数存在する中，保育士自身の子育てと仕事による両立の強みを明確化することにより，両立の利点を明示することが期待できる。

そこで本研究では，従来あまり検討課題として取り上げられることのなかった保育士自身の子育ての経験と，保護者支援の対象である保護者（親）としての当事者性を併せ持つことが，保育全体を含む保護者支援の力量にもたらす相互の影響関係の有無とその内容について検討する。具体的には，就学前児の子育てを経験している保育士を対象とした質問紙調査の自由記述の回答をもとに，テキストマイニングによる量的分析を行い，保護者支援，及び保護者支援と不可分とされる保育（中山・杉岡，2016；亀﨑，2017）も含めて保育士自身の子育て経験と保護者（親）という当事者性を併せ持つことの影響の有無と具体的な内容について，保育士の意識の様相から明らかにすることを目的とする。

Ⅱ　方法

１　調査手続き

中国地方の３県の認可保育所302園に研究の主旨を記した文書を添えて2017年６月～７月に調査用紙を郵送し，子育て経験のある保育士へ協力を求めた。回答は無記名とし，回答済みの調査用紙は，同封した返信用封筒によって園ごとに返送を依頼した。142 園（回収率 47%），747 名の保育士から回答を得た。表紙に設定した研究への同意欄への意思表示の有無を確認し，調査時に就学前の子どもを育てていると回答した239名分を分析対象として抽出し，さらに記入漏れ等の回答に不備のあった20名分を除外し，219名（女性のみ）分を分析対象とした。

２　調査項目

（１）調査尺度への評定を求める質問

30項目から成る「保護者支援力尺度（７段階評定)」，山口（2001）による13項目から成る「親アイデンティティ尺度（５段階評定)」，三木・桜井（1998）による10項目から成る「保育者効力感尺度（５段階評定)」への回答を求めた。

（２）保育士としての子育て及び親としての意識を問う質問

文章完成法（Sentence Completion Test）に準じたものを用いた。文章完成法は，個人の生活体験や自己理解，認知的世界等に基づいて，パーソナリティの全体像を把握するもので，不完全な文章を刺激文として呈示し，それに続けて回答者が自由に文章を完成させる形式のテストである（佐野，1960)。ここでは，質問意図に沿った広範かつ厚みのある記述データを得るため，この手法を援用し，①保育士として親になって良かったことは__，②保育士として親になってわかったことは__，③親である保育士としての課題は__，④保育士，また親として，子育てをする上で工夫していることは__を設定した。①及び②は保育士としての子育て経験への意識を問う内容，③及び④は保育士であり，親でもあることの二重役割と保護者支援力が保育と不可分であるとの指摘（中山・杉岡，2016；亀﨑，2017）を踏まえ，保育への意識を問う内容とした。

（３）フェイスシート

現在の年齢，性別，所属園種（公立／私立）と就業形態，保育経験年数，担当している園児の年齢，役職，我が子の人数や年齢に関する記入を求めた。

（４）倫理的配慮

本研究は，岡山大学教育学部の倫理審査委員会の審査において調査目的と意義，調査実施の手続き，期待される効果や研究成果の公開方法等について承認を得た（課題番号 13)。審査結果に基づいて調査用紙の表紙には，調査目的及び実施方法に加え，調査協力者への回答への自由，回答中断の権利，回答は無記名とすることを含めたプライバシーの保護及び研究成果の公表に際しての情報の取り扱い等，調査倫理に関わる説明を明記し，最後に，調査協力への同意を確認する意思表示欄への記入を依頼した。

３　分析方法

今回は保護者支援力尺度，親アイデンティティ尺度，保育者効力感尺度に対

する回答は分析から除外し，文章完成法を援用した①から④の書き出し文に続く自由記述の全体的な傾向を検討するため，全記述データをテキストマイニングソフト・KHCoder（Ver.3.Beta.03i(樋口，2020)）による分析を行った。

Ⅲ　結果と考察

分析対象とした219名の平均年齢は35.0歳（標準偏差4.82），経験年数が５年以下の初任保育士が25名（平均経験年数3.6年，標準偏差1.11），６年以上15年以下の中堅保育士が145名（平均経験年数10.6年，標準偏差2.66），16年以上の熟練保育士が49名（平均経験年数19.0年，標準偏差2.52）であった（以下,初任保育士は初任,中堅保育士は中堅,熟練保育士は熟練と略記する)。

保育士が自身の子育て経験と保護者支援を含む保育の専門性との関連をどのように捉えているのか，全体的な特徴を検討するため，219名（女性のみ）の全記述データを対象にKHCoder（Ver.3.Beta.03i(樋口，2020)）を用いて分析した。まず，ChaSen（松本，2000）による形態素解析を行って文章を語に分かち書きし，分析対象となる抽出語をKHCoderの品詞体系に沿って切り出す処理を行った。助詞等，テキストマイニングでは分析対象としない語は自動的に抽出語から除外された残りの語が適切に切り出されているかを確認し，必要に応じて保護と者に分けて抽出されていた語を「保護者」と複合語にして切り出す等，適宜，回答の記述に照らしながら分析に使用する語の調整を行った。続いて，抽出語の出現数の算出，及び出現回数の多い抽出語において，２つの言葉の関連性を測る共通性の尺度として設定されている尺度の内，KHCoderでよく使用される尺度であるJaccard係数を用いて，回答者が同じ文中で２つの言葉の共起頻度を規準化して算出した値をもとにデータ構造を示した「共起ネットワーク」を析出した。共起ネットワークとは，出現パターンの似通った語がどのような語であるかということ，すなわち同じ文章中に共起することが多かったのはどのような語であったかを視覚的に捉えやすく示すことができる。「共起ネットワーク」の図から，どのような抽出語がどのような頻度で出現しているのか(語を囲む円の大きさが大きいほど出現数が多いことを示す)，抽出語間の描線の繋がり具合から共起関係を把握し（描線が実線で濃いほど共起関係が強いことを示す)，当該抽出語の間にどのような内容が記述されているのか，抽出語が原文のどのような文脈で記述されているかをKWIC(Key Word in Context)コンコーダンス機能を使用しながら記述内容の特徴を分析した。

１　保育士として子育て経験する良さに関する記述の分析

「①保育士として親になって良かったことは__」の冒頭文に続いて記述された文章から分析対象として抽出された語は1,901語であった。記述された文章における頻出25語を表１に示した。次に，これらの頻出語と共起する語についてJaccard係数を用いて算出した共起ネットワークの構造を図化したのが図１である。図１の語を囲む円が大きいほど文章中の出現回数の多さを示し，語と語を結ぶ描線の太さが太いほど共起関係が強いことを意味する。

表１の頻出語，及び図１の頻出語の共起ネットワークから，子どもに関連し

た記述が最も多く，この頻出 25 語の共起関係は８種の部分から構成されていることが分かった。頻出語は表１とほぼ同様の語であった。語の出現数が多く，多様な共起関係の見られる４種の部分について述べる。

まず，「子ども」「成長」「発達」に関連する部分から「子ども」の「成長」「見る」「色々」「段階」「発達」との連鎖的な繋がりが認められた。文章中の文脈から，「子ども」は園児とわが子のいずれかを指しており，わが子の成長を見て園児の成長への理解が深まる一方，園児の成長からわが子の成長を理解する手立てとなっている記述が多く認められた。「子どもを一面だけではなく，保護者や家庭の状況も含め，広い視点で捉えることができるようになった（32 歳，中堅）」，「子どもへの関わり方が分かっていたので子育てをスムーズに行えた。（30 歳，中堅）」のように，子育てによって子どもを見る経験と保育士として集団の場で子どもを見る経験が多面的な子どもの見方を提供し，相乗効果で園でも家庭でも子どもの育ちに見通しをもって関わりやすくなることが示された。

表1　子育て経験する良さに関する記述の頻出25語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	129	わが子	18
気持ち	68	見る	16
子育て	58	共感	15
保護者	57	思い	15
親	41	大変	15
成長	34	知る	15
分かる	33	出来る	13
自分	28	知識	13
保育	28	考える	12
経験	22	少し	12
理解	21	立場	12
思う	19	大切	10
発達	19		

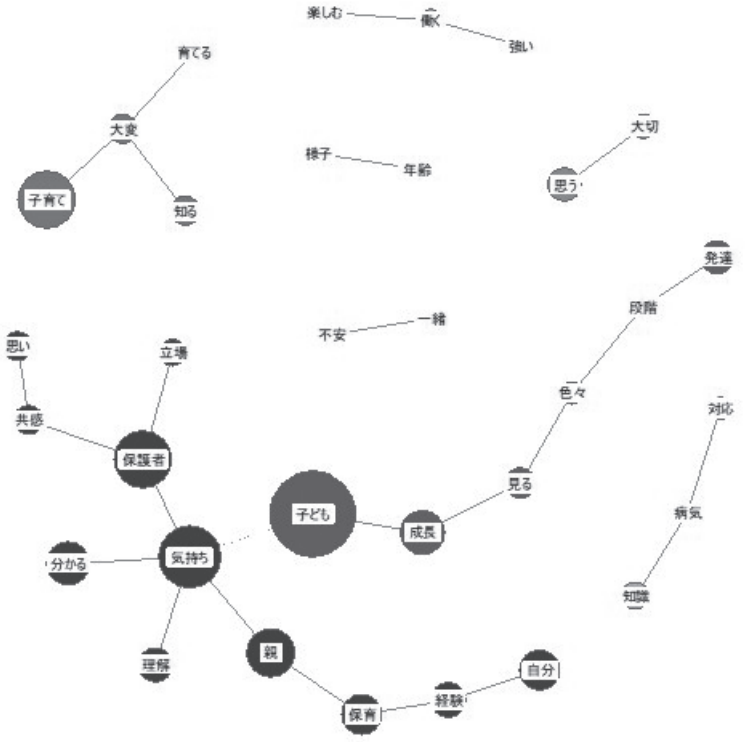

図１　子育て経験する良さに関する抽出語の共起ネットワーク

「保護者」「気持ち」「分かる」「共感」「立場」等の繋がりの部分からは，「子どもがいてよかった。働く保護者の気持ちが初めて分かった。それまでは，保護者はこうでないといけないっていう思いの方が強かった（33 歳，中堅）」

のように，保護者に対する共感的な理解はもちろん，理想にとらわれない，現実的な理解が可能になると言える。保育士であり保護者でもあるという役割の二重性により，「保育者と親，両面の立場が分かり，考え方のズレも解消した。また，保護者の保育士に対する思いや，疑問点も見つかった（38 歳，熟練）」のように，保育士と保護者の視点を兼ね備えた複眼的な視点を持つことにより，保育士の役割を客観的に捉え，必要な支援への理解が深まる可能性が示唆された。一方，保護者として子育てを経験することによって「子どもが泣く理由がよく分かるようになった（33 歳，中堅）」のようにわが子と密接かつ継続的に関わることにより，生活の連続性を踏まえた子どもの心情の機微を繊細に捉えられるようになることも見出された。

「子育て」「大変」「知る」等の語の繋がりの部分からは，「仕事をしながら子育てをする大変さや，子どもに対する親の思いなど，現実的に理解できるようになった。（41 歳，中堅）」のように，仕事と子育てを両立する保護者の実情の体験的な理解が図られていた。

また，「病気」という特殊な状況においては，保育者としての知識や対応の経験が自身の子育てに生かされたという記述が複数認められた。

以上のことから，保育士の子育て経験は子どもに対する多面的な理解への拡充と共に，子どもの日常を連続的に把握することを可能にし，子ども理解への深化が認められた。一方，保護者に対しては，保護者の心情や日常への想像力が高まり，共感的な理解に繋がることが示された。当事者性をもった保育士ならではの保護者理解により，保護者に受け入れられる支援を見出す手立てになることが示唆された

。

２　保育士としての子育て経験による気づきに関する記述の分析

「②保育士として親になってわかったことは＿」の冒頭文に続いて記述された文章から分析対象として抽出された語は 1,808 語であった。記述された文章における頻出 26 語を表２に示した。次に，これらの頻出語と共起する語について Jaccard 係数を用いて算出した共起ネットワークの構造を図化したのが図２である。

表２及び図２の頻出語の共起ネットワークにおいても子どもに関連した記述が最も多く，頻出 26 語の共起関係は９種の部分から構成されていることが分かった。この内，特に頻出する語を有する５つの部分について述べる。まず，「子ども」の最頻出語から「親」「気持ち」「思う」「大切」等の共起が認められた部分について，記述された原文と照らし合わせたところ，「親が保育園に子どもをあずけるときの不安や子どもの涙を見て悲しくなる気持ち（24 歳，初任）」や「子どもが親にとってどれだけ大切で愛してやまない存在かということ（30 歳，中堅）」等，保護者の子どもに対する気持ちの深さや関係性に気づきを得ていた。自身のわが子に対する気持ちを介して，親にとっての子どもの存在の大きさを再確認するに至ったと推察される。「親の大変さや家庭と園での子どもの姿のちがいに気付けたこと（32 歳，中堅）」のように，家庭と園で見せる子

表2　子育て経験よる気づきに関する記述の頻出26語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	112	わが子	20
子育て	81	家庭	19
親	71	一人ひとり	16
大変	55	思い	15
気持ち	49	両立	15
保護者	44	園	13
仕事	29	成長	13
大切	27	保育園	13
思う	26	働く	12
自分	24	姿	11
保育	22	持つ	10
違う	21	難しい	10
分かる	21	様子	10

どもには異なる姿があることに体験的な気づきを得ていた。また，「親が行動を決めるのではなく，子どもの意志（子どもがやりたい，しようとしている事）を尊重してあげることの大切さ（35 歳，中堅）」のように，保育の在り方を再認識する記述も認められた。「個人差があると分かっていても，全体に合わせないといけないという気持ちの方が強かったが，子どもの成長を見る余裕の幅も広がり，個々に合わせる保育の大切さを理解した（36 歳，中堅）」のように，集団と個人に対する保育観の変化を伺わせる記述も認められた。

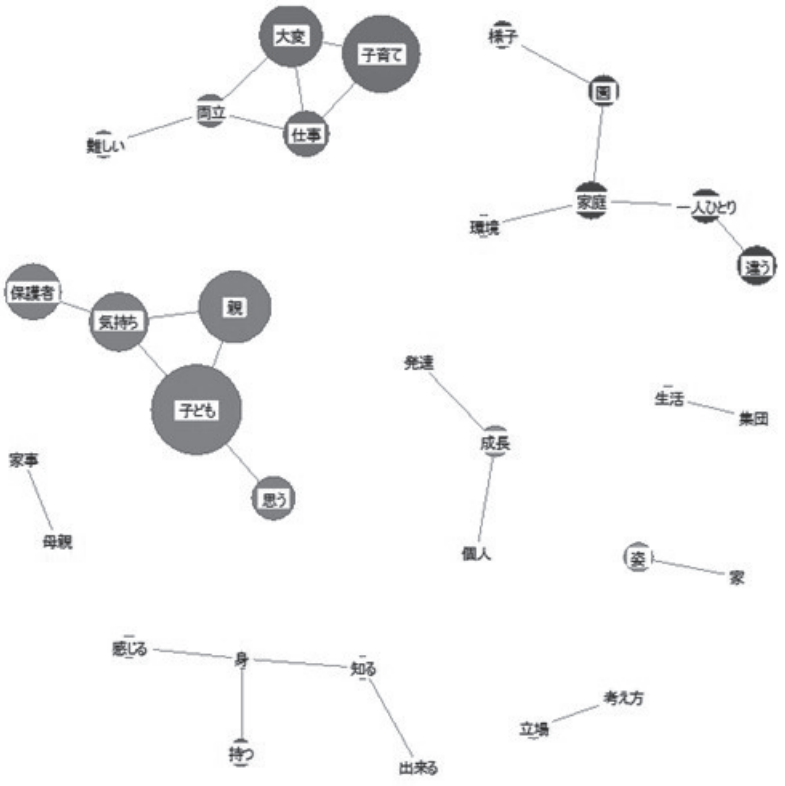

図 2　子育て経験による気づきに関する抽出語の共起ネットワーク

続いて，「子育て」を最頻出語として「大変」「仕事」「両立」等の共起が認められた部分からは，「仕事をしながら子育てをする大変さや，子育てには悩みが尽きないということ（44 歳，熟練）」のように，子育てと仕事の両立の大変さに言及する記述が多く認められた。

「家庭」「生活」「環境」「園」の共起部分では，「子どもの園で見せる姿と家庭で見せる姿のギャップ。両方が本当の子どもの姿であること（39 歳，中堅）」，「子どもには，

園での顔と家庭での顔があり，色々な事を感じながら生活している。何より家庭での時間がとても大切で，情緒の安定につながる（32 歳，中堅）」のように，園での子どもの姿を切り取って理解するのではなく，子どもの生活全体を通して，場による子どもの姿の新たな理解をしていた。

「持つ」「身」「知る」「感じる」の共起を含む部分では，あまり出現回数は多くないながらも，「何気なく子どもを預かっていたが，親は愛しいのにわが子と離れ，子どもを預けるということの重みを感じ，身を持って，大切な役立つ仕事だと再確認した（26 歳，中堅）」，「子どもの園での出来事を悪い事も含めて知りたい（29 歳，初任）」に見られるように，保護者としての当事者性を持った保育士として，保育士の役割の重要性を再認識すると共に，保護者の真の支援ニーズに気づきを得ているようである。「子どもを持つ親の気持ちを改めて感じながら，保育へとつなげられるようになったと思う（30 歳，中堅）」のように，保護者の視点から積極的に保育の在り方を省察し，新たな保育実践を見出す記述も認められた。

「一人ひとり」「違う」「育つ」「成長」の共起を含む部分からは，「個々の成長過程は様々であり，その子どもの成長を決めつけず，待つ事が重要であること（28 歳，中堅）」，「月齢だけではなく成長，発達の個人差や過程の大切さ（41 歳，中堅）」等，出現数はあまり多くはないものの，個人差への理解が深まることが示された。

保育士と保護者（親）との二重役割を経験することにより，家庭での子どもの姿を具体的に想像しながら園生活の子ども理解を深め，個人差の尊重への意識を高めると共に，「子どもの園での出来事を悪い事も含めて知りたい」のように，保護者の支援ニーズへの新たな気づきも得ていることが分かった。

３　保育士と保護者（親）との二重役割を持つことに因る保育士としての課題に関する記述の分析

「③親である保育士としての課題は＿」の冒頭文に続いて記述された文章から分析対象として抽出された語は 1,880 語であった。記述された文における頻出語 25 語を表３に示した。次に，これらの頻出語と共起する語について Jaccard 係数を用いて算出した共起ネットワークの構造を図化したのが図３である。

表３及び図３から，保護者，子ども子育ての語に関連した記述が多く，頻出 25 語の共起ネットワークは 11 種の部分から構成されていることが分かった。この内，出現数の多い語を有する４つの部分について述べる。

まず，「保護者」「子育て」「子ども」「経験」「気持ち」「保育」等の共起を含む部分では，「保護者」「子育て」「子ども」の３つの頻出語の記述が多かった。「保護者の立場に立った子どもとの関わりを大切にし，保護者支援をしっかりとしていく（45 歳，熟練）」，「保護者の目線に立って対応すること，また，わが子だったらと置き換えて子どもを中心とした保育を行うこと（36 歳，中堅）」等の記述から，保護者（親）目線が強化され，子どもを尊重した保育への課題意識が高まっていることが分かった。「自分の子育てを生かしながらも，広い視野で情報がかたよらないようにすること（30 歳，中堅）」のように，自己流に

表3　子育てをする保育士の課題に関する記述の頻出25語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
保護者	82	伝える	18
子ども	78	時間	17
子育て	75	思い	15
自分	46	両立	14
保育	45	わが子	13
仕事	43	相談	12
気持ち	41	大変	12
経験	33	立場	12
親	32	アドバイス	11
思う	23	寄り添う	11
家庭	21	考える	10
共感	19	持つ	10
支援	19		

囚われないことへの自戒も推察された。「親の気持ち，保育士の気持ちのどちらもわかる立場なので，相手の立場に立って一度考え，相手が納得したうえで物事を進めるべき（44 歳，熟練）」と，子育て支援の基本とされる保護者自身の主体性，自己決定を尊重する（保育所保育指針解説，2018）支援が課題として挙げられていた。また，自身の子育てについて「家での仕事（持ち帰りの仕事）も多く，自分の子どもとの時間をどうとるか，仕事の内容をより深めるための時間のやりくり（35 歳，中堅）」，「どれだけ自分の子どもに短い時間で関わってあげられるか（34 歳，中堅）」，「仕事と子育て，どっちも一生懸命したいが難しく，どうしても自分の子どもに無理をさせている気がしてしまう（44 歳，熟練）」のように自身のワーク・ライフバ

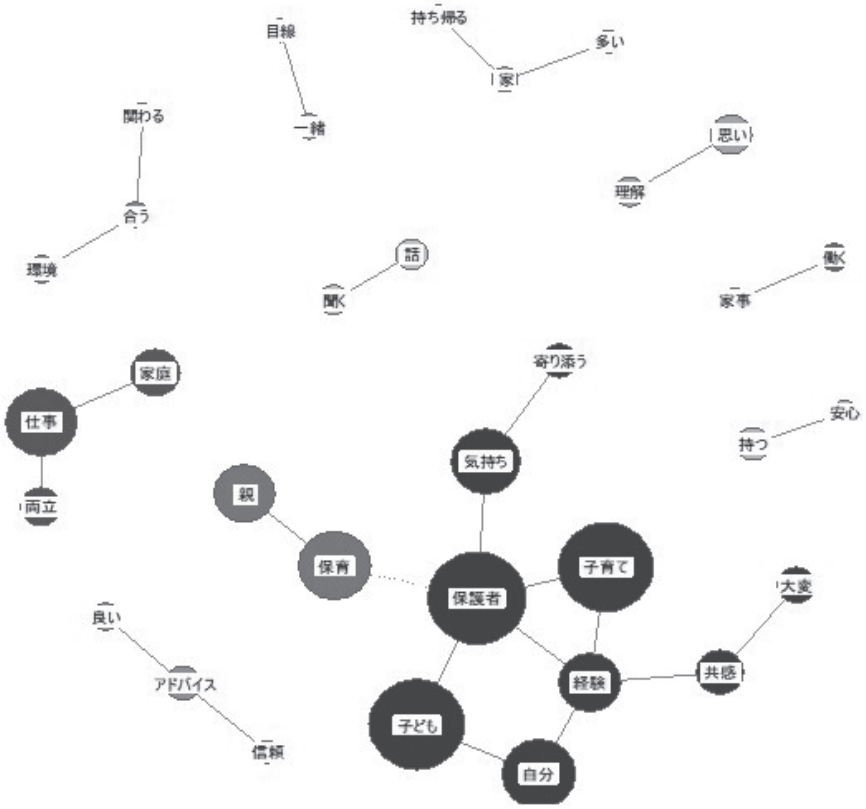

図 3　子育てをする保育士の課題に関する抽出語の共起ネットワーク

ランスの取り方に葛藤を抱えていることも明示された。「保護者には行事への参加を勧めたり，病気の時の早期の対応をお願いしたりするが，自分は両祖父母，夫の協力なしに子育てはできなかったと思う。保育士の子どもも，親が積極的に行事に参加できたり，病気の時に迎えに行けたりすると良いのではないか（37 歳，熟練）」のように保育士の両立支援に十分な対策が講じられていない現状が見えた。東京都保育士実施調査（2019）によると，保育士の退職理由の第３位が「仕事量が多い（27.7%）」，第４位が「労働時間が長い（24.4%）」，第５位が「妊娠・出産（22.3%）」が挙げられているように，保育士個人では解決できない両立上の課題が存在していることが見て取れた。

「仕事」「家庭」「両立」の共起関係からは，「わが子よりも仕事を優先することが多々あるので，仕事と子育てのバランスを上手く同じくらいで保つこと（30 歳，中堅）」，「子育てと仕事の両立で心身ともに多忙な状況にいる親の苦労を十分ねぎらっていくこと（31 歳，中堅）」等，自身の仕事と子育てのバランスや，保護者の苦労に怠りなく配慮することを課題としていた。

「家」「持ち帰る」「多い」の共起関係からは，「家での仕事（持ち帰りの仕事）も多く，自分の子どもとの時間をどうとるか，仕事の内容をより深めるための時間のやりくり（36 歳，中堅）」や「家庭では仕事を持ち帰ることがないようにして仕事の時と家での時の区別をつけるようにする（37 歳，中堅）」の記述が見られ，効率的な業務の遂行が課題と捉えられていた。

「アドバイス」「信頼」「良い」に共起が見られる部分からは，「保護者に信頼されるよう保育の専門家として関わり，良いアドバイス，支援をすること」を課題としていた。保育者への共感に止まらず，より高次の支援を目指して専門性を洗練する課題を見出していた。

これらの課題意識から，保育士と保護者という複眼的な視点で保育士の専門性を俯瞰し，力量向上のための課題を明確化して取り組もうとする一方，両立の困難さに葛藤を抱えながら職務を継続している状況が垣間見えた。

４　保育士と保護者（親）の二重役割を持つことに因る子育て上の工夫に関する記述の分析

「④保育士，また親として，子育てをする上で工夫していることは＿」の冒頭文に続いて記述された文章から分析対象として抽出された語は 1,718 語であった。記述された文章における頻出語 16 語を表４に示した。次に，これらの頻出語と共起する語について Jaccard 係数を用いて算出した共起ネットワークの構造を図化したのが図４である。

表４及び図４から，ここでも「子ども」が最頻出語であった。頻出 16 語の共起関係は 10 種の部分から構成されており，多様な記述が出現した。この内，比較的，出現回数の多い語が見られた６つの部分について述べる。

まず，頻出した「時間」と「一緒」「楽しむ」「過ごす」の共起部分からは，「子どもと関わる時間が少ないので関わる時間を大切にしたり，話に耳を傾けたり，一緒に過ごすようにしている（４0 歳，中堅）」，「子どもと一緒に過ごす

表4　保育士の子育て上の工夫に関する記述の頻出16語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	105	大切	15
自分	35	話す	14
時間	34	親	13
聞く	21	仕事	12
気持ち	20	子育て	12
話	18	思う	10
考える	17	叱る	10
一緒	16	人	10

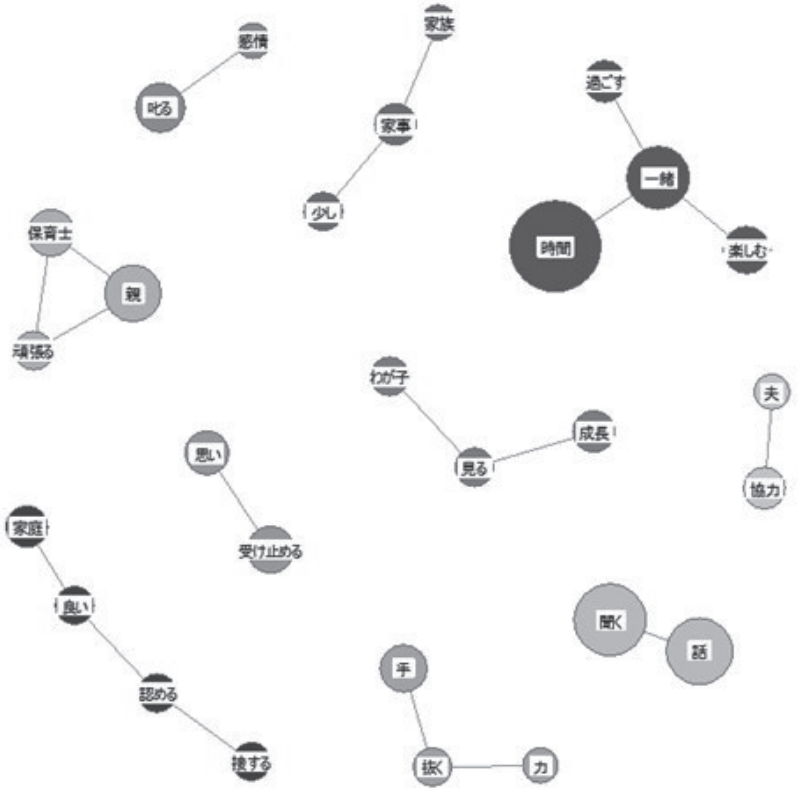

図 4　保育士の子育て上の工夫に関する抽出語の共起ネットワーク

時間を大切にする。良いところをしっかり認める。子育てで悩む時は，誰かに相談する。夫と協力する（31 歳，中堅）」のように，限られた時間の中でわが子と関わる時間を確保するための具体的な工夫が示されていた。比較的出現数の多かった「話」「聞く」の語の共起関係を示す部分からは，「子どもの話を真剣に聞いて共感することや，子どもの思いを受け止めること（31 歳，中堅）」等，保育同様，子どもの声にしっかりと耳を傾ける子育てを大切にしていることが示された。

「親」「保育士」「頑張る」の共起関係を示す部分からは，「頑張りすぎず，夫，両親，友人などに協力を求め，保育士として親として完璧であることを自分に課さないようにしている（41 歳，中堅）」，「親，保育士など，さまざまな役割の中で 1 つ，これだけは頑張り続けたいことを決めている（34 歳，中堅）」のように両立を維持し続ける工夫や，「家で保育士をしない。園に自分の子育てを持ちこまない（36 歳，中堅）」といった，場による役割意識の切り替えを意識的に行う工夫が認められた。

「受け止める」「思い」の共起関係を示す部分からは，「わが子の今の様子（情緒面，発達など）をしっかりと受け止めて接するようにすること（30 歳，中堅）」，

「子どもの気持ちに寄り添い，甘えをしっかり受け止め，情緒の安定を図るようにしている（39 歳，熟練）」といった，養護的なかかわりを重視した関わりの工夫が見られた。

「叱る」「感情」の共起関係を示す部分からは，「イライラしている時は，一呼吸おいて落ち着いてから叱り，叱った後はフォローをして子どもの気持ちを受け止める」，「叱らないといけない状況の時は長く叱らないようにしている。どの子どもにも声をかけ、ユーモアのある事をして笑顔を引き出す（33 歳，中堅）」のように，自身の感情コントロールに努めていることが分かった。

「見る」「わが子」「成長」の共起関係を示す部分からは，「沢山の子どもの成長が見られるので，それと照らし合わせ，自分の子どもへの接し方を考えている（32 歳，中堅）」，「成長段階を見て，今，何が必要なのかを考え，わが子にも色々なことに挑戦させたりしている（41 歳，熟練）」のように，保育士ならではの専門性や経験を生かして，子育てに援用していることが推察された。

子どもを育てる営みは専門家としての保育士と親の区別がなくなる危険性を孕むことを考慮して，保育の専門家として自らを律しながら専門的な知識や経験を生かし，程よい両立のバランスを工夫していることが明らかになった。

Ⅳ　総括と今後の課題

本研究では，従来あまり検討課題として取り上げられることのなかった保育士自身の子育ての経験と，保育全体を含めた保護者支援の力量にもたらす相互の影響関係について検討した。その結果，次のことが明らかになった。

まず，保育士として子育てを経験する良さに関する記述から，保育士の子育て経験が子どもに対する多面的な理解の拡充に加え，園でしか見ることのなかった子どもの姿を家庭での姿も含めて捉えることによって，子どもの日常を連続的に把握することを可能にし，子ども理解の深化が図られることが明らかになった。一方，保護者（親）としての当事者性をもった保育士ならではの保護者理解により，保護者の心情や日常への想像力が高まることによって，共感的な理解が深まると共に，保護者を全面的に受け入れる支援を見出す可能性が示された。子ども及び保護者に対する理解の深化は上田・澤田・赤澤（2007）や衛藤（2015）の知見を支持する結果であった。

続いて，保育士としての子育て経験による気づきからは，保育士と保護者（親）の二重役割により，家庭での状況を踏まえた園生活における子ども理解により，個人差の尊重への意識が高まると共に，保護者の具体的な支援ニーズに気づきを得ていることが分かった。併せて，ともすると子どもの最善の利益の実現を目指すあまり，保護者に対して厳しい目を向けがちな保育士（神谷，2012）としての在り方の抑制に繋がるような保護者と保育士の両者の立場を俯瞰する複眼的な視点を得て，専門的な力量向上のための課題を明確化し，新たな実践的取組みに挑戦する保育士の姿が明示された。

他方，保育所という職場全体に家庭と仕事の両立を認める雰囲気があり（中根，2014）ながらも，依然，保護者の両立支援を生業とする保育士自身の両立

支援が十分でなく，両立の困難さに葛藤を抱えながら職務を継続している状況が改めて確認された。母親が一人で子育てを抱え込もうとすること，育児の要求水準を上げることは逆説的にその母親たちの適応や発達を阻害するとの指摘がある（Rizzo, Schiffrin & Liss, 2013)。このような危機に瀕しながらも，個々に保育の専門家として自らを律しながら程よい両立のバランスを工夫し，保育士としての役割と親としての役割を適宜切り替えながら，それぞれの立場で得た気づきを相互に積極的に活用し，好循環を創出している努力が明らかになった。保育士自らのこのような両立のための工夫は，保護者の子育てへの具体的なアドバイスともなり得るのではないかと考える。

なお，今回は保育士の個別の条件は混みにして，就学前の子どもを育てている保育士をまとめて，子育て経験が保育を含めた保護者支援の専門的力量との相互の影響関係について検討した。今後は，保育者効力感や保護者支援力の自己評価の程度によって，子育て経験からの気づきや実践への生かし方に違いがないか，実践力の向上に繋がる要因についてさらなる検討を進めることが課題である。また，本研究結果のように，子育てを経験した保育士の存在が実践の保育の質の向上に寄与しているにもかかわらず，妊娠・出産を機に離職する者も少なくない。今後の課題として，妊娠・出産期の保育士の現状を含めた保育士を取り巻く職場体制への意識についても検討し，両立支援に必要な要件を明らかにすることを課題とする。

謝辞

お忙しい中，本研究にご協力くださいました保育士の皆さまに心より御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

引用文献

衛藤真規（2015）保護者との関係に関する保育者の語りの分析―経験年数による保護者との関係の捉え方の違いに着目して―，保育学研究，53(2)，84-95.

樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析【第２版】内容分析の継承と発展を目指して，ナカニシヤ出版

亀﨑美沙子（2017）保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤，保育学研究，55(1)，68-79.

神谷哲司（2012）保育現場における「対応の難しい親」はなぜ産み出されたのか？：家庭支援，保護者対応に関する研究動向からの一考察，Asian Journal of Human Services，３，1-15.

柏女霊峰．橋本真紀（2010）増補版 保育者の保護者支援 保育相談支援の原理と技術，フレーベル館

片山美香（2016）若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究―保育者養成校における教授内容の検討に生かすために―，岡山大学教師教育開発センター紀要，第６号，11-20.

片山美香・髙橋敏之（2021）保育士の保護者支援力の認知と親アイデンティテ

ィ及び保育者効力感との関連，日本家政学会誌，72(6)，348-361.
金城悟・安見克夫・中田英雄（2011）保育職の大変さとやりがいに関する保育者の意識構造について―M-GTA による分析の試み―，東京成徳短期大学紀要，44，25-44.
岸本美紀・武藤久枝（2017）現職保育者が求める養成教育における保護者支援力の育成，現代教育学研究紀要,11,25-34.
厚生労働省（2017）保育所保育指針＜平成 29 年告示＞，フレーベル館
厚生労働省（2018）保育所保育指針解説，フレーベル館
松本裕治（2000）形態素解析システム「茶筅」，情報処理，41(11)，1208-1214.
三木知子・桜井茂男（1998）保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響，教育心理学研究，46，203-211.
中根真（2014）保育所保育士のワーク・ライフ・バランス（Work-Life Balance）の実態と課題―両立の「難しさ」に焦点をあてて―，保育学研究，52(1),116-128.
中山智哉・杉岡品子（2016）保育士の保育相談支援に関する質的研究―相談支援における困難性と専門性の深化のプロセス―，九州女子大学紀要，53(1)，19-38.
成田朋子（2012）保護者対応に求められる保育者のコミュニケーション力，名古屋柳城短期大学研究紀要，34，65-76.
Rizzo,K.,Schiffrin,H.,& Liss,M.（2013）Insight into the parenthood paradox:Mental health outcome of intensive mothering. Journal of Child and Family Studies,22,614-620.
佐野勝男・槙田仁（1960）精研式文章完成法テスト解説一成人用一，金子書房
東京都福祉保健局（2019）東京都保育士実施調査（厚生労働省 令和３年５月26 日開催　保育の現場・職業の魅力向上検討会（第５回）参考資料「保育士の現状と主な取組」より間接引用）
https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000784219.pdf
上田淑子・澤田忠幸・赤澤淳子（2007）子育てをする保育者の仕事と家庭の役割―とくに子育てが保育力量に及ぼす影響について―，乳幼児教育学研究，16，15-22.
山口雅史（2001）親同一性を構成する３つの次元―幼児期の子どもを持つ母親における親同一性の構造―，家族心理学研究，15(2)，79-91.

Awareness of Parental Support in Light of the Dual Roles of a Nursery Teacher and a Parent

KATAYAMA Mika*1

This study examined the relationships of the mutual influence of the dual roles

of a parent and a nursery teacher who has childrearing experience on the professional competence of nursery teachers in providing parental support concerning childrearing and their childcare. As a result, it was found that in addition to expanding the nursery teachers' multifaceted understanding of children, to deep a continuous understanding of children's everyday life by grasping the children's life. Furthermore, as nursery teachers with childrearing experience could better imagine the feelings and everyday life of guardians (parents). Nursery teachers were continuing to work while struggling with the difficulty of balancing the dual roles.

Keywords: Nursery teacher, Childrearing experience, Dual roles, Understanding of children, Parental support

*1 Faculty of Education, Okayama University